

Just Now

1. はじめに

本稿は、筆者が小学校外国語活動における「教師発話の研究」を行うために、実際に小学校現場を訪問して授業観察を行う中で、並行して取り組んだ「授業改善」のための実践例を紹介します。日常の授業は「計画－実践－評価（省察）」のプロセスで行われますが、教師の「授業力」は、授業の「省察」を行って高まるものと思われまふ。客観的に授業を省察するには、自己省察のほか、他者からの観察など、異なる視点からの意見を聞くことが新たな「気づき」の機会となります。

筆者は、昨年（2011年9月～12月）、兵庫県伊丹市西部に位置する伊丹市立池尻小学校において、授業観察の機会を得ました。そこで、外部の立場である筆者と英語指導員（藤井真弓氏）、並びに担任教師（福永康彦氏）との3者によるある一定期間実施した「リフレクティブ・ティーチング」の取り組みを紹介しなす。

2. 伊丹市立池尻小学校の「外国語活動」の現状

様々な授業ファクターの中で、本校の「教員の指導形態」と「絵本の読み聞かせ」の2点について活動状況を紹介します。

(1) 英語指導員と担任教師のT-T

担任教師と英語指導員で、事前の授業打ち合わせを綿密に行い、とても息の合ったT-T（チーム・ティーチング）が行われています。指導過程において、両者による指導の役割分担が明確であり、各々の役割がとてもうまく機能しています。担任教師の役割は主としてクラスルーム・マネジメントであり、英語指導員が外国語活動の指導に専念できるように教室運営をしています。授業は、ほぼオール・

ビデオを使った

「リフレクティブ・ティーチング」 —教師発話分析に着目して

立花千尋 Tachibana Chihiro
(近大姫路大学)

イングリッシュで進められ、担任教師も極力英語を用いるように努めています。

絶妙なT-Tのコンビネーションによって、児童の学ぶ意欲をうまく引き出し、児童の応答の際に「指名」をするのは、児童ひとりひとりの個性や学力を把握している担任教師が行います。そのことによって、適切な児童の応答が引き出され、授業がスムーズに進行しています。そして、さらに豊かな発展性のある授業へと展開されています。



担任教師と英語指導員は、役割分担の明確なT-Tにより、児童の積極的な発話や多様な応答を誘発しています。例えば「私は理解しています」という応答として、「I know.」「私に答えさせてください」という応答として、「Let me try.」と英語で活発に応答しています。また、応答できないときは、「Sorry, I don't know.」と言うなど、児童も英語を使うことがとても楽しい様子うかがえます。

(2) 絵本の読み聞かせ

本校の外国語活動の特色の1つとして、「絵本の読み聞かせ」があります。1年間に各学年で2冊の絵本を選定し、授業の最後の5分間を読み聞かせの時間として設定しています。

「目標」である「最終的に絵本を見ながらストーリーが言えるようになること」を事前に児童に伝え

ておくと、目標を目指して真剣に聞くようになります。「ねらい」は、①英文をまるごとインプットして記憶に残るようにする、②暗記した英文を自分の言葉としてすらすら言えるようにする、③文の中で「色」と「動物」を組み合わせさせてインプットする、④動物の鳴き声や色など、日本語と英語との違いから異文化理解をする、などが挙げられます。そして、毎時間読み聞かせる中で、①黙って聞く段階、②自発的に読み始める段階、③大きな声で明確に読める段階へと進展していきます。

3. 授業後のリフレクション(省察)の実際

2週間に1回の割合で、定期的に授業観察を行います。事前に指導案に目を通し、授業の目標と内容を把握して授業観察に臨みます。

具体的な観察方法は、「ビデオ録画による授業分析」と授業中の「観察記録の分析」です。まず、教師と児童のインターアクションの発話を記録します。典型的な教室談話である IRF (I: 教師の開始発話, R: 児童の応答発話, F: 教師のフィードバック発話) に着目して、授業言語を記録していきます。ビデオ録画をトランスクリプトに書き起こし、観察記録と合わせて分析・考察を行います。

(1) 授業後のリフレクション

授業終了後に、授業観察記録と授業者のふり返りをつき合わせながらリフレクションを行います。教師発話に対する児童の理解度や発話の誘発度に焦点を当てて分析・考察を行います。そして、次時の改善点を明らかにします。その後、筆者は次時までビデオ録画を文字に書き起こし、分析して改善点を授業者に伝えます。



(2) 授業言語に着目したビデオ録画の分析

授業者は、オール・イングリッシュで授業を行うことを前提としています。児童が教師の発話を理解していないと判断したとき、ある手段を用いて理解に導く方略があります。

以下、授業で用いられた事例をいくつか紹介します。

① 英語を簡単な英語で言い換える例

T: What's your **favorite** sport?

S:? (児童は favorite がわからない)

T: What sport do you **like**? (言い換える)

S: I **like** soccer.

T: Oh, your **favorite** sport is soccer.

S: Yes. (児童は favorite がわかるようになる)

② ジェスチャーや場面設定で理解させる例

T: **Make a line**.

S:? (児童は発話の意味がわからない)

T: This is "**Make a line**." (実際に列を作って)

S: I know.

③ 理解の手立てとして日本語を用いる例

簡単な英語で言い換えても理解できないときは、すべてを日本語に置き換えるのではなく、一部のキーワードとなる単語だけを日本語で与えて理解につなげます。

(3) リフレクティブ・ティーチングの成果

外部の観察者を導入し継続的に「授業のリフレクション」を行うことで、授業者自身では気づかなかったことに気づき、より客観的な視点で授業改善ができるようになったとコメントしています。

4. おわりに

本稿で紹介したビデオ録画によるリフレクティブ・ティーチングは、昨今では授業改善の方法として、広く行われるようになってきました。特に目新しい方法ではありませんが、ある一定の期間、定期的に継続して行うことは時間的にもかなり困難なことです。しかし今回取り組んでみて、よりよい外国語活動の授業を構築するには、この方法を強く推奨したいと実感しました。リフレクティブ・ティーチングを通して、「教師の成長」という観点からも、まずは同僚と協働で取り組み、学校全体の授業力向上に繋がることを期待します。